

さやうなら。手風琴の町、さようなら、僕の抒情詩時代。

は、大正十四年稿の「軽井澤で」の最後の一行。「さやうなら」と「さようなら」の仮名遣いが混在している。また句読点の付け方も微妙な感じだが、筑摩書房版『芥川龍之介全集』第四巻（昭和46年6月刊）に拠り、編者が新たに訂正した。

## 澄江堂——抒情詩

小川 和佑

さやうなら。手風琴の町、さようなら、僕の抒情詩時代。

澄江堂は「抒情詩」の一行に片山広子への想いを固く封じ込めて大正十四年の初秋の軽井澤を去った。そして、再び軽井澤を訪れなかった。昭和二年七月、梅雨明けの東京の湿度の高い夏は呼吸するにも澄江堂には苦しかった。彼の心はもう定まっていた。——するとふいに心が軽くなった。堀辰雄が窪川鶴次郎と訪れた二十日の夜、澄江堂は久しぶりに明るく笑い声をあげた。辞去しようとした窪川を呼びとめて、彼は懐紙に包んだなにがしかの紙幣を無理に窪川の手に握らせた。そして、その五日後の未明に澄江堂は自らの生命を絶った。

長崎の照菊は早いその日の夕刊を広げて震

え出した。あれは昨日のように鮮かだった。夕日の射して来た部屋に「水虎晚帰之図」が照菊を見つめている。片山広子はその朝、澄江堂の死を電話で知った。彼女は昨年二月、芥川の最後の手紙を文机の上で読み返した。末尾にいかにも澄江堂らしい一句が添えてあった。

道ばたの墓なつかしや冬の梅

「いまは夏だわ……」と片山広子は誰にともなく呟いた。虹を見た晩夏の午後からあの人には死を考えていたのだろうかと思っただ。

二十七日、谷中斎場は車が混んでいた。喪主の比呂志が喪服の文字未亡人に手を曳かれて遺族席に着き告別式が始められた。菊池寛が弔辞を読む。「……ただ悲しきは君去りて我等が身边とみに肅々たるを如何せん。」

広子は嗚咽をこらえられなくなった。

きみ死にてわれをば教へたまはりぬ人の死ぬるはみづからのため

それが「抒情詩」に応える彼女の歌だった。

出座：昭和63年（1988）3月20日（日）第31回座会（神田神保町・五十嵐ビル）

初出：昭和63年（1988）4月号「短説」（通巻33号）

初刊：昭和63年（1988）7月1日『青いうたげ』昭和六三年度 年鑑短説集（第二巻）

再録：令和6年（2024）5月25日ブログ版「小川和佑先生著書目録」（海とユリ社刊）

（<http://ogwkzsk.blog.fc2.com/blog-entry-106.html>）

再録：令和6年（2024）9月20日「小川のせせらぎ／小川和佑ゼミナールOB会誌」第3号

Copyright (C) 1988 Ogawa Kazusuke All rights reserved.